
白夜叉再臨

朝露詩奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白夜叉再臨

【Nコード】

N9221Z

【作者名】

朝露詩奈

【あらすじ】

佐幕とか攘夷とか、しみつたれた武士道になんて興味ない。ただ、己の守るもののために刀を振るうのみ――。かつての白夜叉としての自分を封じ込め、万事屋として呑気に働く銀時が、再度白夜叉が刀を振るうとき、地球はどうなる？

「ある依頼人」がきっかけで、再び白夜叉として戦うことを決意した銀時。そんな彼を巻き込む、大事件とは。

白夜叉再臨篇、開幕！

第零訓 白夜叉降誕（前書き）

まずは、お決まりのあのシーンからどうぞ。

第零訓 白夜叉降誕

冷たい雨が、2人の男の背に突き刺さる。

不吉な厚い雲で覆われた空は太陽がとうに姿を消し、あたりを灰色で埋め尽くしていた。

「はあ……はあ……はあ……」

長い黒髪の男が、刀に寄りかかるように座り込んだ。それに続いてもう1人も、彼に背を向け、膝をつく。

「はあ……はあ……」

荒い呼吸はなかなかおさまらない。

頭から出ている血が頬を伝い、口に流れ込む。生臭い鉄の味が、口の中に広がった。

彼は顔をぐいっと上げ、薄闇にかすむ視界の向こうを睨んだ。無数の、赤く妖しい光が、四方八方から彼を睨み返してくる。

みな、敵の目だ。

「……これまでか」

——八方塞がり。逃げ道はない。

「敵の手にかかるより、最後は武士らしく、潔く腹を切ろう」

観念して、彼は刀を抜いた。いままで、幾人もの敵から彼を守ってきた、ぼろぼろの愛刀だ。彼はその柄を両手にしっかり持って、腹に向けた。

しかし、いざ、と刃を押し込もうとしたとき——もう一人の男が、すつくと立ち上がった。

「バカ言ってんじゃねーよ。立て」

その男は刀を抜き、大胆にも、立ちはだかる敵に向かってずかずかと歩いていく。

「美しく最後を飾りつける暇があるなら、最後まで美しく生きようじゃねーか」

低く小さく、しかし確実に大きな決意を秘めているその言葉に、心が揺さぶられた。

自分の腹に突き刺そうとしていた刀を、目の前の敵に向かってかざしながら、立ち上がる。

2人、背中合わせになった。

「行くぜ、ツラ」

「ツラじゃない、桂だ」

短くその言葉を交わしたあと、彼らは互いには目もくれず、ただ友の背中を信じて……まっすぐに、敵中に突っ込んでいった。

——その男、銀色の髪に血を浴び。

長髪の男、桂は当時の戦友のことを、そう振り返る。

戦場を駆る姿は、まさしく夜叉――。

第零訓 白夜叉降誕（後書き）

大丈夫なのか、自分。

受験の時期に、なぜこんなことを！？

えーと、普段は沖神専門の私が、頑張って劇場版を意識した話を書こうと決意しました。

更新は遅くなると思いますが、どうか付き合ってくださいませ。

第一訓 美人ってただ立ってるだけでいいよね(1)(前書き)

さて、と。

最初の辺はやっぱりギャグありで、それからだんだんシリアスに…
…が銀魂スタイルですよ。多分。

よし書こう。

第一訓 美人ってただ立ってるだけでいいよね（１）

じめじめと雨が降る、インディペンデンスデーの朝。

「おはようございまーす」

万事屋の従業員——というと聞こえはいいが、実際はただの雑用・ツツコミ役以外の何でもない物悲しい少年、志村新八は今日も元気に出勤する。

「おー、新八か。入れ入れー」

朝っぱらから低すぎるテンションと低すぎるノリで、苳牛乳のストローを加えながら手招きする銀時。その隣では、神楽が酢昆布をくつつやくつつちゃと噛みしめている。

「いや…あのさ、苳牛乳と酢昆布の匂いが混ざって、空気がすごいよどんでるんですけど…」

「気にしないのが一番ネ、新八。これが万事屋のアロマル」

「うん、違うからね。こんなアロマが充満してたら、誰も来ないから」

新八は一通り突っ込んでから、ソファに座り、茶を入れた。

「それで銀さん、来月の生活費どうするんですか？このまま依頼来

なかったら、食べてけませんよ」

彼は銀時に声をかける。

すでに五月も下旬、であるにもかかわらず、今月の収入はゼロ。家賃すら払えないかもしれないのに、銀時と神楽に緊張感というものはほとんど見受けられない。

「大丈夫ネ。世の中、みんな何とかできるようになってるアル」

「そーだぜ新八。今までだってなんだかんだ言いながら乗り切ってきたじゃねーか、この漫画も。何度打ち切りの危機に陥ってきたとか」

言いながら銀時は、ごろんとソファに横たわる。ますます不安を募らせる新八。

「てか、その打ち切りの危機を脱することができたのは編集部のお力のおかげですからね！アンタら何も努力してないじゃないですか！これじゃあ、いつまでたっても貧乏暮らしですよ」

しかし銀時は、いつものことながら、新八の忠告をさらっと無視。

「あーあ、何か面白いことねーかなー。例えばよ、オメー。玄関開けたら裸の美女が立ってたりとかしたら、一発……」

「その前に、アンタの頭を一発殴りたいですね」

新八は冷ややかに言い放った後、酢昆布の空き箱で巨大な城を作っている神楽に向き直った。

「それと神楽ちゃんも！酢昆布だって、いくら単価が安いったって、そんなたくさん買ったら大赤字だからね！空き箱だけで要塞でできるし！」

「ふーっふっふっふ。悪の帝王の孫娘の婿のいとこの飼ってる犬のおもちやになってるダメガネをやつつけるには、これくらいの設備が必要ネ。覚悟するアル新八ハイ！！！」

神楽が傘を掲げ、「突撃！」と叫ぶ。すると即座に、定春がキバをむいて新八に突進してきた。

「ぎゃあああああ！！！」

定春に噛みつかれた新八は、頭部から血を流しながら断末魔。やつとの思いで巨大犬を振り払い、「どんだけ大掛かりなボケかましてんの神楽ちゃん！」と声を荒げるが、神楽はへらへらと笑っている。

「駄目だ…こんなんじゃ、来月はホントに飢え死にだ…」

げっそりする新八。その横で、銀時もさすがに思いつめた顔をしている。ああ、やつと真剣になってくれたか…と新八は思ったが、

「やっぱなー…こう、シチュエーションとしては、全裸のなまめか

しい女がこう…」

などという銀時のつぶやきを聞いて、余計に深いため息をついた。

その時。

ピンポーン、と軽いチャイムの音が響いた。

「ん？…カモが来たか」

待ってましたとばかり、銀時は起き上がっていそいそと玄関に向かう。

「いや、来客のことをカモだなんてそんな——」

いい加減にしてくださいよと言おうとした新八は、しかし言葉が途切れてしまった。

銀時が開けたドアの向こう…そこには、ほぼ全裸でタオルだけをはおった若い女が立っていたのだ。

全身びしょぬれで傷だらけ。肩まである茶髪からは、血の混じった水が滴っている。

沈黙の時間が流れた。

そして時計の秒針が一周半ほどしたとき、銀時がついに静寂を破った。

「あのー……そういうプレイならどこかよそでどうぞ」

「ってオイイイイイ！……違うでしょ、なにかよっぽどあったんですよ！事件とか！」

新八が顔を赤くしたままあわてるが、銀時はただ鼻をほじっている。

「あー、そういうアレか、あの、初めての　ピー　が無駄に痛くてベッドを転がりまわったっていう……」

「傷だらけになるベッドってどんなの！？」

「きつと、切りたての丸太でできたやつアルよ」

「どこの民族？」

新八は、同僚が次々にボケを連発していることに罪悪感を感じつつ、おずおずと女を見た。

残りの2人も、とりあえずは落ち着きを取り戻す。

そして次の瞬間——女が突然、どこに忍ばせていたのか、包丁を取り出した。

「……！！」

第一訓 美人ってただ立ってるだけでいいよね(1)(後書き)

この調子で行ったら、完結までに100話突破しそうで怖いです。

でも大丈夫…なんとかなるさ。きっと……。

美人ってただ立ってるだけでいいよね(2)(前書き)

今日、遅めのクリスマスプレゼント貰いました。

それはなんと、自分専用PC!!

よっしゃ、これでもっともっと小説が書ける!

美人ってただ立ってるだけでいいよね(2)

「!!!」

万事屋メンバーが、そろって体をこわばらせる。

しかし刃先が向けられたのは彼らではなく、彼女自身の胸だ。

「…いいわ、死ぬわよ!!」

銀時が、ほうつと息を吐きだした。

「あはは。新八、俺ビックリしたぜ。殺されるかと思ったもん」

「ですよー銀さん。ははっ、いきなりあんな物騒なモノ取り出すんですから」

「なーんだ、ただの自殺願望者アルかー」

「って……」

3人、もう一度女を見る。

彼女は深呼吸し、包丁をいまにも胸に突き刺そうとしている。

「やめろオオ!!何があつたか知んねーけど、人んちで死ぬのはやめよう!」

「そうですよ!てか、いや、まず命は粗末にしないでください!」

「故郷に捨て置いてきたパピーのこと、思い出すヨロシ!!」

口々にワーワーギヤーギヤーと叫び、なんとか自殺を阻止しようとするトリオ。女は、かなりびっくりしたように彼らを見たが、すぐに陰しい顔になった。

「関係ないわ、最後の頼みの綱のあなたたちに話を聞いてもらえないんだもの……もう死にたい！」

「いや、分かった！俺らが悪かった！話きくから、ついでに最新号のジャンプあげるから死なないでエ！」

銀時が意味のわからないことを絶叫しながら床に頭をこすりつけると、女は素直に包丁を下ろした。そして先ほどまでとは打って変わって、やわらかな微笑みを浮かべる。

「あら。ジャンプくれるなら、自害はやめておきますわ」

「いや……ジャンプで引き下がるって、アンタの命どんだけ軽いんですか……」

新八が半眼になってツツコむと、女はとたんに唇をキツと結んだ。

「いいわ。私、死——」

「なないでくれよな」

銀時が彼女からすばやく包丁を取り上げ、新八に命令。

「オイ、すぐ服もってこい」

「はい」

新八は奥に引っ込むと、ものの3秒でTシャツと短パンを持ってきた。かぶき町マラソン大会でもらった、新品だ。

「どうぞ！あの、そこ、廁ありますんで、着替えてください。あ、

ホント、申し訳ないですけど、あの、下着はなくて、えっと…」

女の機嫌を損ねたら大変だと、しどろもどろ厠の場所を説明する新八。そんな彼に、女はにつこりと笑いかけた。

「結構よ。どうも、ありがとう」

女は一礼すると、タオルを翻して厠に入った。それからすこしして、がちやりとドアが開く。

「お待たせしたわね」

大人びた口調でそう言う彼女の美しさに、万事屋3人は息を呑んだ。

濡れた髪にほのかにまわせている色気に、銀時の喉がごくりと上下する。

そして、次の瞬間。

「ひどいわ…ひどすぎる!」

大声とともに、女はぼろぼろと涙をこぼし始めた。

「こんな扱い…虫けらみたいな、この扱いって…私に、死ねって言ってるの? 暗にそう言ってるのね!」

言うや否や、再び包丁を――。

「ってちよつとオ! さっき銀さんが預かったはずでしょその包丁! なんで! 何で持つてるんですか!」

「かまわないでちょうだい、もう私には…あなたみたいな男…」

肩を震わせながら、彼女は自分の首に刃を当てる。

「いや、だから！分かれたカップルみたいなコント、しなくていいですから！」

つばを飛ばす新八。彼をなだめるように背中をぽんぽんと叩くのは神楽である。

「まあまあ、新八。女は出会いと別れを繰り返して大きくなるものネ」

それに続いて銀時も、

「そーだぜ、女ってのはなァ、自殺しちまいたくなるほどの失恋を通して、大きくなるんだ。……乳が」

などと言う。

「乳って何で！？どんだけ欲求不満なんですか」

新八は疲れた目で銀時を見てから、女に向き直った。

「あの、…確かに下着なしって、そんな扱い僕らだって申し訳ないと思っではいるんですけど……でも、自殺だけは」

「…そんなんじゃないの」

彼女はかぶりを振り、真っ赤に泣き腫らした目で新八を見た。瞳には、深い悲しみ、そして、言葉では表現しようのない絶望が渦巻いている。

「そんなんじゃないのよ、私は、私はね……」

青紫色の唇から、憂いを帯びた吐息と嗚咽が絶え間なく漏れる。沈みきった空気が、彼女の周りを満たしていく――。

「おい、ネーちゃんよ。んな辛れー話なら、無視に喋れなんて言わねエよ。ただな…命は無駄にしちゃいけねエ」

銀時が、静かで、それでいてよく通る声で、女を諭した。

「な？無理に言う必要はねエから…」

「……ううん。ちゃんと、言わせていただくわ」

女は数秒の間を取った後、意を決したように、こう告げた。

「このＴシャツ…Ｌサイズよ！私、そんなにデブに見えるかしら！？ひどい！」

「いや知らねエよ！何その小さすぎる悩み！」

即座に切り返す銀時。しかし女いわく、

「小さくなんかないわ、大きすぎるのよ！」

「大きいって何だ。それ悩みのサイズじゃなくてＴシャツのサイズだろ！」

「そうよ、Ｔシャツが大きすぎるのよ！屈辱よこれは！」

「それだったらノーパンのほうが屈辱なんじゃねーの！？」

「いいえ、Ｌサイズのほうが屈辱よ。死ぬわよ！」

「あつそ、じゃあ勝手に死ぬや」

「ってオイイイ！銀さん何言ってるの！死なせないでくださいよ！」

馬鹿なやり取りを繰り返したあと、銀時はぷはーっとため息をついた。

「んで？とりあえず、アンタが依頼人ってこったな」

「はい」

彼は女をまじまじと見詰めながら、おもむろに神楽にこう命じた。

「例のあれ、持ってこい」

「はいアル！」

神楽は、戸棚のほうにトタトタと駆けていく。

「例のあれって何ですか？」

新八がたずねるが、銀時は無視。

「僕だけハブか……」

悲しそうな呟きも、無視。

うなだれている新八と、罪の意識もなく平然としている銀時のところに、神楽が戻ってきた。

「銀ちゃん、これでいいアルか？」

手にしているのは、1枚の書類。

「おー、それでよし。んじゃ、まあこっち来て、必要事項を書いてくれ」

銀時は女にソファを勧め、向かい合って座った。新八と神楽も、その横に腰を下ろす。

「これが、依頼申込書だ。名前と住所を、この欄に」
「はい」

申込書なんてあったわけ？と新八は思ったが、ここは黙っておいた。銀時は説明を続ける。

「そして電話番号とメールアドレス、生年月日。あとは……ここにバスト・ウエスト・ヒップ」

と、ここで新八は我慢できずツッコむ。

「ちょ、銀さん！何考えてんの！一発殴っていいですか？一発いいですよ！」

「駄目だ、テメーは一生童貞でいろ」

「一発ってそつちじゃねエ！」

銀時と新八が軽く言い争っているその横で、女はというと、

「なるほど、ここにスリーサイズを。B…89。W…58。H…」

「何で鵜呑みにしてるんですかアナタ」

「あら……書かなくていいの？」

「当たり前でしょ。お名前と依頼だけしていただければ、仕事しますから」

良心的な新八が言うと、銀時が舌打ちをした。「空気読めよバカ」とその目が言っているが、対して新八も、「アンタこそまじめな商売してくださいよ」と無言で反論した。それはともかく。

「…私の名前は、竹中蘭冥、歳は24。あなたたちに依頼したいの

は、
弟の搜索よ」

美人ってただ立ってるだけでいいよね(2)(後書き)

自分のPCがあるって、いいですね
気分がいい。執筆も止まらない！！

あ、それと蘭冥って、「らんめい」って読むんですよ。
戦国時代に活躍した竹中半兵衛さんをもじりました^^

美人ってただ立ってるだけでいいよね(3)(前書き)

あけましておめでとございます。

えと、街明かりが華やかです。

こないだ手術を受けましたが、エーテル麻酔はあんまり好きじゃありません。

午前2時ぐらいにはもう寝てました。

たまの首が取れる夢を見ました。

以上、頭が壊れかけた前書き。

美人ってただ立ってるだけでいいよね(3)

「…私の名前は、竹中蘭冥、歳は24。あなたたちに依頼したいのは、弟の搜索よ」

「搜索？」

万事屋の3人が、声をそろえる。女——蘭冥は、うなずいた。

「そう。1週間前から弟が失踪して、帰ってきていないの。家に残ってたのは、『捜さないでください』というプラカードだけ。捜すなどはいったい何を捜すなつてことなの？その何かを捜してる時点で、私が捜してはいけないものを捜してしまっているのだとしたら、それを捜す人を捜さないといけないんだけど、その捜す人も捜してはいけないのだとしたら、捜す人を捜す人を捜す人を……」

「もういい。黙れ」

銀時が面倒くさそうに蘭冥を制し、新八も「何、捜さないでください地獄に迷い込んでるんですか」とツッコむ。「ていうかそれ、エリザベスのときと同じパターンだよな」

「とにかく！弟はね、私に『さよならイオネル』の一言も言わず、行ってしまったのよ！」

「何か…設定が……」

新八は頬を引きつらせたが、「作者が切羽詰つてるときにはよくあることネ」と神楽に言われ、口を閉ざす。蘭冥は話を続けた。

「私たちね。幼いころに流行り病で両親をなくして、以来ずっと貧

乏暮らし。……だけど、弟は頑張ってくれたわ。心臓病をわずらっている私の医療費を稼ぐため、連日連夜働いて。それがきつと、とても大変で、負担だったのね。…だから、家出なんてこと」

「……」

銀時は、真剣に話を聞いている。新八と神楽など、もうすでに唇をかみ締めている。

「私ね、弟に、もう一度だけ会いたいの。帰ってこいとか、働けとか、そんなことを言うつもりはないわ。ただ……あなたのお姉さんののに、何もしてあげられなくてごめんねって、謝りたいの。…それだけ」

蘭冥が、深々と頭を下げた。

「見てのとおり、私はさつき追いはぎに襲われて。払えるお金なんて、もうどこにも持っていないわ。だけど、どうか手伝ってほしい。……弟を探し出すことに成功したら、そしたら……そうね、私を遊郭に売ってちょうだい。病気のことを黙ってれば、こんな私だけど、きつと買い手ぐらいいるはず。そのお金を、あなた方に代金として支払うわ。……受けてくださる？」

——遊郭に売られてもいい。どうしても、弟に会いたい。

無垢な姉の、重い決意が感じられる言葉だった。

銀時は目を閉じた。

「よし。この弟思いの姉ちゃんの依頼、受けてやろうじゃないか。
なあ神楽」

彼がうんうんとうなずくと、

「そうアルな銀ちゃん！」

神楽もすつくと立ち上がった。

そんな2人を見て、蘭冥は瞳を潤ませる。

「ありがとう万事屋さん……そして、神楽ちゃんも」

「私たちに任せるアル、蘭ねーちゃん！」

「うふ、頼もしいわコナン君」

蘭冥、銀時、神楽の3人が楽しそうに談笑しているその横で、哀れ新八は1人肩を落とした。何で僕、いないのと同然の扱いなんですか？……そう目線で訴えるも、効果はなし。

「んじゃ、いくか神楽。あ、蘭冥はここで待っててくれよな。心臓、悪いんだろ」

「どうも。……でも私も一緒に行つて、弟のこと、いろいろお伝えしなければ捜せないでしょう？お言葉に甘えてばかりではいけませんし……」

「……ノーパンで行くのか？」

銀時が、少し眉をひそめた。怪我もしているのだし、万事屋で休んではどうかと再度提案するも、彼女は断固として首を振った。

「私も連れて行つて。私だけのらりくらりとして、あなた方の手を煩わせても申し訳ないわ」

上目遣いの蘭冥に、銀時もタジタジ。

「そーか。じゃ、無理しねーようにな」

銀時は蘭冥の肩に手を乗せ、神楽を引き連れて玄関を出る。そして新八はというと。

「あー銀さん。僕は……？」

すると銀時は、何かを思い出したようにポンと手を打った。

「ちょ、僕のこと忘れてたんすか」

「うん」

「さらっと言うなよ！傷つくんですけど！」

「お前の仕事な、アレだ。あの、自宅警備」

キメ顔を作り、親指をぐつと立てる銀時。

「あー、はいはい……」

なるほどね、自宅警備。

新八は、心の中でうなずいた。

うん、いいんじゃない？だって大事な役目だもんねそれ……って、

「格好よさげに言いますけど、ただの留守番じゃねーかアアア……！」

本日最大の、新八の魂の叫びがこだました。

「そんなん、鍵かけときゃいいでしょ？何でさっきから僕だけハブ！？」

だが、ワーワーとまくし立てる新八を横目で見やりながら、銀時は鼻をほじる。

「いいか、心のメガネを光らせて不審者をとっ捕まえるんだ！」

「心のメガネって何。僕の心は無機物なの？」

「うるせーよ新八。メガネはメガネらしく黙っとくアル」

「ついにお前らインディペンデンスデーの憂さ晴らししてるだけだろ！？」

「違うネ、女の子の曰ヨ」

「男性読者の方々に謝れエエー！！」

それから数分間ボケとツツコミの連鎖は続き、なんやかんやで、新八は留守番もとい自宅警備をすることになった。なってしまった。

「本当ですよネ。本当に、僕ここにいたら、来週から昇格させてくれるんですよ」

「本当だ。今日お留守番してるだけで、テメーはツツコミメガネキヤラを卒業できるんだ。ありがたく思え」

いいように言いくるめられたとしか思えない状況だが、新八は新たな未来への希望を胸に、要求を呑んだ。だまされたという表現のほうか、この場合は適切なのかもしれないが。

美人ってただ立ってるだけでいいよね(3)(後書き)

新八がかわいそうですね・・・。

ていうか皆さん、大丈夫ですか？

私のこの文章で、状況伝わりますかね・・・。

第二訓 廃工場は無法者のたまり場（1）（前書き）

冬休みですからね。

大量に書けます。

それと、昨日トリビア見た方いますか？

かりんとうを洗面器の水につけるやつ。あれ、見てから私やってみ
たんですよ。

で、今朝見たら・・・・・・・・

キヤー？ゝ（。Dゝ）

第二訓 廃工場は無法者のたまり場（1）

万事屋を出た蘭冥は、銀時と神楽に話しかけた。

「これ。……弟、俊太郎の写真なんだけど。1年前の」

見せられたぼろぼろの紙には、若い——おそらく10代後半の、おとなしそうな少年が白黒で写っていた。

「んん？」

紙を覗きこんだ2人は一瞬黙り込み……それから大きく吹き出した。

「な、何ですかアタの弟さん。ストレートパーマかけた日村？」

「ありえねー、この顔あり得ないアル！」

100年に一度かと思われるような不細工なその顔に、神楽が手を叩いて大爆笑する。銀時も苦しそうにみぞおちを押さえ、蘭冥はというと、

「私の弟を侮辱する気！？……やっぱりあなたたちに頼んだ私がバカだったわ、もういい、死ぬ！」

と涙ながらに叫んだ。

「オイ、悪かった、やめろって」

銀時があわてるも、蘭冥は聞く耳を持たない。

「止めないで！死ぬんだから！」

言うなり彼女は、ズボンのポケットに手を差し入れ……。

「だから、お前はどんだけ刃物持ってたんだ！」

「いや…違うみたいヨ銀ちゃん。蘭ねーちゃん、バナナ出しただけアル」

「神楽ちゃん、食べる？」

「何でバナナ！？それはアレか、バナナ●ンとかけてるのか？つーか自分も弟がブサメンだって認めてるんじゃないか！」

3人の繰り出す意味不明の芝居に、周囲の人は好奇と呆れの視線を浴びせている。

「もういい、恥ずかしい。……行くぞ」

歩きながら、「それでね」と蘭冥は話を続ける。

「弟の行きそうなところ、手当たりしだいつぶしてくしか方法は無いと思うんだけど……」

「なるほどな。で、心当たりは？」

銀時がたずねると、蘭冥は腕を組んで少しうなった。

「うーん……数ヶ月くらい前から、髪の毛が金色になってたり、体中に小さな穴を開けて宝石みたいなのを引っ掛けたりね。家に帰ってくると青あざだらけだったり、あ、そういえば家のお金が無くなってたわ」

「……」

銀時と神楽が、途方にくれて顔を見合わせるが、蘭冥は気づいていない。

「きっと、あの子は優しい子だから…家のお金は募金でもしたんでしょ」

「いや…アンタの弟さんね、これ俺が言うのもなんだけどさ、ヤから始まってキーで終わって、間にンがあるの何かじゃないの？」

銀時がやんわりと突っ込むも、

「え？そんなはずはないわ、あの子に限って。宝石はきっと、自分がショーケースになって売り歩いてたんだと思うし、お天道様をおぎすぎたから髪の毛が金色なのね」

と、蘭冥は瞳を潤ませる。

「ダメだこの人…客観的に物事見てないよ。髪染めたとかピアスとか、認めたがってないよ！」

銀時が小声で神楽にささやく。神楽もささやき返した。

「でも、どうしますリーダー。ヤン・キーだとすると、どこをあたればいいアルか」

「そうだな、だったら立体駐車場とか廃工場とか、ゴミ箱とか…」

銀時が神楽のこめかみをぐりぐりし、怒った彼女に腕を噛み付かれたところで、蘭冥がぴたりと立ち止まった。

「……匂っわ」

鼻をくんくんさせ、空気を吸い込む蘭冥。

「匂うって何が。加齢臭？」

「うっん…弟の匂い」

蘭冥の瞳が、きらりと輝いた。それから機械的な声で言う。

「前方728・61メートル先、俊太郎発見」

「いや、何なのアンタ。鼻ビゲーション？」

「つくづく、つかみにくいキャラアル」

銀時と神楽がこそって毒舌を吐くが、蘭冥は気にしない。

「分かるわ。弟が…弟がいる！」

「何でだよ。蘭冥、お前スーパーヤサイ人なの？スパイラーマンなの？」

「違うけど、行くわよ！」

ドビュウウウウン！

蘭冥が、心臓を患っているとは思えない速さで前方に突進していく。

「あ、待ってヨ蘭ねーちゃん！」

「待てエエエエエ！」

*

新八は、万事屋でボーっとしていた。

何しろ、やることがないのだ。

自宅の道場に戻ろうかとも思ったが、万事屋を留守にしたことがばれたらあとで大変な目にあうのは分かりきっている。

「まあ…でも、今日こそ」

言いながら、彼はここぞとばかりにテレビをつけた。

普段はチャンネル権を銀時と神楽に取られてしまうのだが、今日は特別。邪魔する者どもはどこにもいない。

「えーと、この時間は…お通ちゃんの特番！」

チャンネルを大江戸テレビに変えると、流れてくる軽やかな歌声が傷ついた新八の心を癒していく。

《チョメ！チョメチョメチョメ公〜！ポリ！ポリポリポリ〜
らえ！》

「いやっほう！」

その時——画面上部のテロップに、ニュース速報が流れた。画面を食い入るように見詰めていた新八が、その内容に目を見開く。

「……何だって…!？」

第二訓 廃工場は無法者のたまり場（1）（後書き）

あーあ・・・

かりんとうのやつ、やるんじゃないかった。

おかげで今日は、食欲減退です（苦笑）

朝っぱらからあんなの見たんじゃない、しかたないですよ。

廃工場は無法者のたまり場（2）（前書き）

いやー

今日、焼肉行ってきたんですよ。
ユツケ・・・なかった（泣）

その分、カルビをたらふく食ってやりました。

お腹が痛いです。

廃工場は無法者のたまり場（2）

「……ここね」

銀時たちが到着したのは、大きな工場の入り口の前。

見たところあちこちがさびれて、とくにラインは停止されているようだ、中から人の気配がする。そろりと覗くと、目つきの悪い男たちが幾人か、刀を持って警備に当たっていた。

「オイオイ、何だここは。ヤンキーどころか、攘夷浪士の巢屈じゃねーか」

「蘭ねーちゃん、どうするアルか」

「えっと……」

蘭冥は少し考え込み、それからすっと立ち上がって工場の扉を押し開けた。

「あのー、すいません。私、竹中蘭冥という者ですけど、ここに竹中俊太郎って人いない？私の弟なんですけど」

ものすごく危険なことをしている割に、けろりとしている蘭冥。

「あつ、馬鹿！」

銀時が彼女を止めようとするも、時すでに遅し。

「ああ？ たった3人でここに乗り込んでくるたあ、いい度胸じゃねーか」

浪士たちが卑しい笑いを浮かべながら立ち上がり、3人の方へ向かってくる。それぞれ、白くきらめく刀を携えて……。

体格のいい、リーダーらしき男がゆつくりと前に進み出た。

「俊太郎な。アイツは俺らが監禁してるぜ。……俺らの仲間と喧嘩やらかしたからなア……」

ねちっこい猫撫で声だ。

「っ……」

「工場の3階だ。後で連れてってやるよ。……ただし、テメーら全員、物言わぬ屍にしてからな。本拠地の場所を知られたんじゃ仕方ねえ……。あーあ、俊太郎の奴、姉の死体を見たらどんな顔するんだろうな？」

「何ですか？そのサディスティックな趣味。ここ、イメクラじゃないんですけど」

「イメクラでも死体は扱わねーよ、白髪」

「うるせー奴だぜ……」

銀時がにらみ付けると、

「殺れ！！！！」

リーダーが刀を振り上げ、同士に命令した。

工場の奥から、次々と浪士たちが押し寄せ、3人を取り囲む。銀時、神楽、そして蘭冥に向けられた刃が光った。

「うおおおおおつつっ！！！！！！」

雄たけびとともに銀時は木刀を抜き、前方にいる5人の浪士の刀を薙ぎ払った。

「ぐあっ！」

「何てこずってんだ！野良犬1匹に小娘2人、倒すのに時間などかかるまい」

「やあああああ！」

右から、左から、攻撃はとまらない。

神楽は傘で刀を受け止め、相手がひるんだ隙に蹴り上げる。が、即座に別の浪士が前に立ちふさがる。銀時はそのみぞおちにこぶしをめり込ませた。

「蘭冥！俺らのことはいいから、今のうちに行け！！」

「でも……」

「行くんだ！」

立ち止まる蘭冥をかばうように向こうに押しやり、銀時は倒れた浪士の刀を抜き取った。彼を後ろから狙った別の浪士の肩は、神楽に撃ち抜かれる。

「がはあ！」

飛び散る赤。

蘭冥が工場奥の階段を駆け上がって姿を消したのと同時に、銀時は浪士を3人斬った。

「大丈夫か神楽！」

「こんなカスども……私だってすぐ片付けれるアル！」

「そうか……」

一瞬だけ注意がおろそかになったその隙に、彼の背中に2本の刀がせまった。

着物が裂け、血が滲みでる。

「チッ」

振り返りざまに、彼は自分を斬った浪士の腕を落とした。

「テメーら！やるんならやれやアア！！！」

銀時が吠える。

「よし、野郎ども！殺っちまえエエエエ！！！」

暗く湿った工場内に、叫び声と刀のぶつかる音だけがしばらく響いた。

しかし——3分も経ったころには、それらはすべて静まり返っていた。

「はぁ……はっ……はぁ……」

「銀…ちゃ…」

あとに残ったのは血の海に沈み込んだ浪士たちと、背中合わせに肩を寄せ合う侍と少女のみ。

「行くか神楽…俊太郎のいる……3階に」

*

「ヤバイ…僕、どうすれば……!!」

万事屋に一人残された新八は、焦ったように周りを見渡した。速報の内容がいまだに信じられないくらい、脳内はパニック状態に陥っている。けれど、ここで冷静に考えなければ、仲間の命にかかわるのだ。

「このままじゃ、銀さんと神楽ちゃんが危ない…」

刀ならある。今から加勢に行くべきか？間に合うだろうか。いや、それより、もっと確実な手段を取ったほうが……。

「こうなったら…」

新八は刀を引っつかむと、草履を履くのも忘れて、弾丸のような

速さで表に飛び出していった。

廃工場は無法者のたまり場（2）（後書き）

えっと

いくつか感想をいただいてるんですが（まだ忙しくて返信できていません…いずれちゃんします）、

速報を見た新八の反応について、
一体、何が起こったんですかと
続き待ってますよーと。

残念ながら、まだ明かされません。
次回かなあ…分かるとしたら。

お楽しみに。

廃工場は無法者のたまり場（3）（前書き）

CSで正月前、銀魂一挙放送やってましたよね。
あれの録画たまってたんで、吉原編を見ました。

劇場版になったのは紅桜編ですけど、私は吉原編のほうが好きです。
いや紅桜編もちろん好きですけど。

吉原編はなんか神ってます。

ストーリーもグラフィックもいいけど、BGMも神だ。
心の奥がざわざわざわ…ってなってる

「うおおおおお!!!」

な感じになります。

しかも何と言っても、晴太の背負っている運命が銀s（ry

これ以上書くと収拾がつかなくなるので・・・自主規制します。

廃工場は無法者のたまり場（3）

銀時と神楽は、足元に倒れた浪士たちをよけながら、3階へと走る。途中で生き残りが何度か彼らの目の前を阻んだが、銀時はわき目も振らずに木刀を振るいながら前へと突き進んだ。

そして……。

「蘭冥!!」

「蘭ねーちゃん!!」

3階で、銀時と神楽が目にしたもの。

それは、傷ひとつない蘭冥と俊太郎だった。2人とも、うれしそうに笑っている。

「よかった…無事だったのか」

「ええ。そちらは？」

「見てのとおりさ。ちょっとやられちゃったが」

銀時は苦笑しながら、「でも、まあ依頼は果たせたんだし」と言う。

「ついでに連中もみんな始末した。あとで真選組に突き出しゃ、金もせしめられる」

「真選組に、ねえ…」

蘭冥がつぶやく。その口調がまるで銀時を鼻で笑っているようだった。ので、彼は怪訝そうな顔をした。

「蘭冥……？」

「いいじゃない。それであなたたち、貧乏暮らしから抜け出せるんでしょ？まあ……」

彼女と弟がいるところよりも、もっと奥。

その暗闇の中から、こちらを凝視している殺気立った目がいくつも現れた。

「……生きてここから帰れば、だけどね」

蘭冥は低く笑いながら、俊太郎が差し出した刀を取った。

「さすが、白夜叉と呼ばれた男。強いじゃないの」

冷たい瞳。残忍にほくそえむ唇。
それはまるで別人だった。

「お前…まさか！」

銀時の瞳孔が開く。蘭冥はそれを見て、面白そうに声を上げた。

「実際に会ってみてびっくりしたわ。あなたのどこが夜叉だっていうの？ 弟に会ったの心臓が悪いだの、私の芝居を見抜けないなんて大丈夫かしらと心配したけど……腕はなまっていらないよう。十分、使い物になるわ」

「どういうことだ！」

銀時が、静かに凄みを利かせた。そして蘭冥をにらんだまま、右手をゆつくりと、腰の刀の柄に滑らせる。

「まあ、そう慌てないでよ。今すぐ殺すだなんて、言っていないでしよう？」

「…何をする気だ」

「私たち——天人全排除を掲げる攘夷集団、白狐とともに、戦いなさい」

蘭冥が、表情のない目で彼を見据えながら、命令した。

「さっきの雑魚どもはね、私の手下なんだけど……結局は捨て駒つてところかしら。あなたの実力、試させていただいたわ。ここから全部見てたのよ、あいつらを全部倒してしまうところ」

「……」

銀時がぎりりと歯を食いしばった。

この女に振り回されていた自分自身に、どうしようもなく腹が立

っている。

「ふふ…ずっと欲しかったわ、宇宙での戦いに慣れた人がね。知ってる？鬼兵隊の高杉様から聞いたんだけど、刀竜星が地球に攻め込む計画を立ててるらしいのよ。だから、やられる前に私たちが向こうを侵略するってわけ。刀竜星には、金塊が眠ってるらしいしね。あなたの力が不可欠なんだけど、どう？一緒に戦わない？」

「…高杉？」

銀時が鋭い目で訊いた。蘭冥はうなづく。

「そう。彼が、あなたの存在を私たちに紹介したのよ」

「……」

彼はうつむいた。

これは絶対、高杉の罠だ。

しかし、仮に罠だとして、俺に出来ることは一体……？

「銀ちゃん……」

神楽が不安そうに名前を呼んだ。

銀時の口元が、ふっとゆるむ。

「願い下げだな」

蘭冥が眉を寄せた。

「そんなこと言つて、あなた、今ここで無駄死にする気？」

「無駄死にだア？」

銀時の眼に、小さく光が宿った。

「俺らは死なねエよ… たった1人の男の実力をはかるために仲間を犠牲にしたり… 金塊目当てに他の星を侵略しようとするような組織にや、殺されたりしねエ！」

「なるほどね……」

蘭冥が、氷の微笑みを浮かべた。

「あの男と、隣の娘。… 始末なさい」

工場奥に潜んでいた人だかりが、いつせいに動き出した。

「っ！！」

銀時が刀を構え、無数の浪士に突進していく。

「神楽、逃げろ！」

「銀ちゃん、無理ネ！」

「馬鹿！早く、今のうちに逃げるんだ！！」

「だって！」

見れば、神楽もすでに取り囲まれてしまっている。額に汗を浮かべながら、必死に攻撃をかわしている最中だ。

「くそっ……」

銀時の左肩が、血を吹いた。それでも、彼は目にも止まらぬ速さで抜刀しては相手を斬り捨てていく。

「ぐああ……！」

返り血で真つ赤に染まった着物を振り乱しながら、敵中に突っ込む銀時。早くも、白夜叉の面影がちらつき始めている。

「お前ら！早くやつちまいな！」

「おれはやられねエって……言ってるんだろ……！！」

次から次へと敵をさばっていく彼の姿は、とても人間とは思えないほど。

神楽も浪士たちの間を縫うように舞いながら、傘に火を吹かせている。

しかし——多勢に無勢。

先ほどの戦いですでに疲労がたまっている2人にとって、幾十人もの人を相手取るのは不可能に近かった。

少しずつ、少しずつ、上へと追い詰められていく。

「ねえ…白夜叉さん、私がいいこと教えてあげようか」

蘭冥がピストルを構えながら、小首をかしげた。

「いやいやあ、アンタさあ、俺の好みなんだよね。どう？つまんねエ喧嘩なんざやめて、あとで俺といいことしない？」

「そんなこと言って、ホントは余裕なんてないくせに。どこまで持つかしらね？」

ピストルの銃口が火を噴いた。即座に弾丸を刀で叩き落す銀時。

「私が、天人を排除しようとしてる理由…知りたい？」

「くっ…」

銀時と神楽は、すでに屋上まで出てきてしまっている。もう後はない。

晴れ渡る空の下、斬り合いは最高潮に達している――。

廃工場は無法者のたまり場（3）（後書き）

あらー

蘭冥さんの化けの皮がはがれちゃいました。
しかも銀さん、結構ケガしてます。

でもね、蘭冥さん、実は悪い人じゃないんですよ。
いや、十分悪役ですけど、根は悪い人じゃないんです。

・・・と信じたい。

廃工場は無法者のたまり場（４）（前書き）

注意書きですっ！！

この章は、人によつてはですけど、

銀神 or 沖神みたいに感じるかもしれません。

（実際は違います）

やっぱりシリアスな時は、いがみ合つてゐる人達でも協力しなきゃいけないですね。

ですから、これから先も

銀妙・銀新・土沖・土銀・新神・近沖・銀沖

みたいなのが多発すると思います。他のも出てくるかも。
でも、これはあくまで「それっぽい」だけですから、
実際はただの「絆」ということにしてやってください。

廃工場は無法者のたまり場（４）

「あれは…何ヶ月前のことだったかしら…」

乱闘の中、蘭冥の声だけがいやに鮮明に耳に入ってくる。

「私のね、たった１人の友達が、天人に殺されたの。……吉原で」

銀時と神楽はその声を背に、襲い掛かる敵からひたすら身を守っている。

「たった１人の、大切な親友だったのに。私と同じく、自警団『百華』の一員で、とても強くて、頭もよくて。自慢の親友だったのに、殺されてしまったのよ」

「お前も百華だったのか。どうりで強いはずだぜ……。それで？」

銀時が、浪士を１人めった斬りにしながら問う。

「ちょうど、その女の子……神楽ちゃんみたいに青い目で、長いオレンジ色の髪を後ろで三つ編みにしてて、中華服を着た色白の若い男に殺されたの。私の目の前でね」

「——！！！！」

瞬時、神楽の顔に戦慄が走った。銀時も、それを見逃さなかった。

「おい……！！」

ガシャン。

神樂が、表情をこわばらせたまま、傘を取り落とした。すると、それを見計らったかのように、蘭冥の銃口がまっすぐ神樂に向けられる。

「以来、私は百華をやめて、天人と戦うことにしたってわけ。分かった？」

神樂が、怯えたようすでじりじりと後ずさりする。
蘭冥の唇が、めくれ上がった。

「死になさい——」

澄んだ青空に、銃声が一発、二発——。

「私…死ぬ、の……？」

さっと、視界が暗転する。
しかし、手足の感覚はまだはつきりしている。

「……あれ……」

そう、つぶやいた時だった。突然、視界を覆っていた暗闇が、鮮やかな赤に変化した。

生暖かい液体が、神楽の服を濡らしていく。少しずつ、少しずつ、染み込んでいく……。

「え……」

太陽にきらめく銀色。

優しい瞳。

けれどその人の口からは、自分の名前ではなく、泡立った血が吹きこぼれた。

そう——銀時自らが盾となり、神楽を守ったのだ。脇腹と胸に、弾を受けて。

「銀ちゃんつつ……!!」

現状を認識した神楽が、悲鳴を上げた。

そして、聞きなれた声たちが屋上の階段を駆け上がってくるのも、それと同時にだった。

「銀さん、神楽ちゃん!!」

「誰だっ……!!?」

浪士たちは皆そちらに反応し、銀時と神楽の当面の敵はいなくな
った。

「万事屋ア！」

「旦那！チャイナ！」

神楽の目に飛び込んできたのは、黒い人ばかり。刀。バズーカ。
そして――

「新八……」

神楽は、ほうつと息をついた。

「やってくれたな……ぱつつあん……」

銀時は目を細めて新八を見ながら、力を入らない手で神楽の頭を
かき撫でた。

「新八…神楽……生きて、戻れ……」

念じるように、声を喉の奥から振り絞ってから、彼は軽くなる体
に身を任せて目を閉じた。神楽が、はっと目を見開く。

「銀ちゃん……やだ、銀ちゃん…嫌だ、嫌だ、嫌だ——！！！」

神楽は激しく首を振り、泣きわめく。

そして太陽は5月といえど、心身ともに疲れきった神楽をじりじりと照らしつける……。

「嫌アル…」

黙ってなどいられない。

立って、武器を手にして、戦いたい。

あいつらを、許すわけにはいかない！！

「く……っ…」

だが、猛る心とは裏腹に、日差しにすっかり弱った手足はぴくりとも動いてくれない。

「そんな…」

ああ、もうどうなってもいい。

身動きを取れないがために全てをあきらめ、弱気になりかけた神楽を、黒い腕がかえ上げた。

「あっ……！！？」

嫌だ、銀ちゃんから、引き離される！！

「銀ちゃん……」

神楽が銀時に向かって手を伸ばすと、頭上から乱暴な言葉が降ってきた。

「黙れや。この状況で旦那のことあーだこーだ心配したって、てめーが死ぬだけだろうが」

「お前……？」

廃工場は無法者のたまり場（4）（後書き）

そういえば、前書きで思い出したんですけど。

私の一番好きなCPはなんでしょう？

A 銀妙

B 沖神

C エリジャス（殴

答えはAです。

銀妙。これは、実際脈アリじゃないか？？と思っております。

ですから大好物なんですけど、残念ながら私にはオトナの恋は書けない。

だから読むほう専門です。

Bの沖神ですが

これも好きです。でも、本編見てる限りありえないんじゃないかなーと。

だけど、一番書きやすいし、実際くっつけばナイスカップルだと思うので、2番目に好きってところでしょいか。

Cのやつは・・・

この世に存在しないと思います。

長文失礼しました。

第三訓 性格悪い子供の保護者は親離れしようにもできない（1）（前書き）

第三訓突入です。

わーい！！

そのまえに、断じて言い切ります。

前回のあれは沖神じゃないですからね！！
↑

さて、時間は少し戻りまして、今回は現場に向かう新八のシーン。
どうぞ。

第三訓 性格悪い子供の保護者は親離れしようにもできない（1）

土方の後について、真選組の隊士とともに工場の階段を駆ける新八。

「てめーらアア！この先に、指名手配の過激派攘夷浪士グループがいるはずだ！リーダーの竹中蘭冥も含めて、誰一人逃すんじゃないぞー！」

土方が、士気をかき立てながら屋上に躍り出た。新八がそれに続き、後ろから沖田、山崎、他の隊士も進み出る。

「……っ！！」

新八が目にした光景――それは、見たところ百人近い敵。

そしてその中心には、神楽を抱いて真っ赤に染まった銀時。

舌先まででかかった悲鳴を、彼はぐつと飲み込んだ。

「銀さん、神楽ちゃん！！」

「万事屋ア！！」

「旦那！チャイナ！」

嘘だと、思いたかった。

この屋上に広がる惨事、いったいどう受け止めればいいのだろう。

「行けエエエエ！！！」

「うおおおおお！！！」

隊士たちがめいめいに刀を握り締め、浪士の集団の中に飛び込んでいく。しかし新八は、心が混乱の海に沈みきったまま、いつこうに浮かび上がってこない。何をどうすればいいか分からず、いやな汗をかいたまま棒のように立ち尽くしていた。すぐそこで起こっている乱闘も、まるで目に入らない。

「銀……さん……」

その時新八は、銀時がこちらを見て口を動かしていることに気づいた。

「何だって？」

新八は目を凝らした。唇の動きを、注意して読み取る。

「……いきて…もどれ」

——彼の胸の中を、電流が駆け巡った。

脳裏にフラッシュバックしたのは、紅桜の事件。

《やればできる子だと、思ってたよ》

銀時は穏やかに笑いながら、そう言うてはいなかったか。

「…僕は」

刀の柄を強く握り、抜刀。

「やる——!!」

地面を大きくけり、彼は心の勢いだけで高く飛び上がる。

「うおおおおおっ!!!!!!!!」

僕には銀さんがいる。神楽ちゃんがいる。土方さんも沖田さんもいる。

1人じゃない。

やれば、できる！！

「おい、何だあの坊主！！」

浪士の1人が、宙を指差した。

「白夜叉のそこには、あんなのもいたのか！？」

「やべーぞ、あの目！！」

新八に気づいた2、3人が刀に手をかける。

しかしその時にはすでに、彼らは音もなくばったりと倒れていた。新八の、たった一撃によって。

「来いやアア！！」

頭では何も考えないで、ただ心の導くまま、彼は剣を振るう。敵を倒すたび、自分も斬られた。頬を。肩を。足を。腕を。

……でも、僕は負けない!!

新八は自分自身にそう誓って、刀を大きく振りかぶった。

第三訓 性格悪い子供の保護者は親離れしようにもできない(1)(後書き)

何でカッコいいのか。

新八のくせに。

メガネのくせに。

何で強いのか。

童貞のくせに・・・。

性格悪い子供の保護者は親離れしようにもできない(2)(前書き)

はい。

えーと緊急地震速報を耳コピしてキーボードで弾いたら
母が驚いて風呂から飛び出てきましたよーっと。

一応タオルは持ってたんですけどね。

銀魂並みの出来事ですw

新八のツッコミがきいてみたい^^

性格悪い子供の保護者は親離れしようにもできない(2)

その頃、土方は一度に5人を敵に回しながら、相手の隙をうかがっていた。

「……っ……」

敵から目を逸らさないようにしながら、背後の沖田に呼びかける。

「総悟」

「何ですかイ」

いつもと変わらぬトーンの返事が返ってくる。そのことに、彼は少しだけ安心した。

「お前、チャイナを連れて逃げろ」

「…は!？」

「いいか…この数の敵の中を、人をかかえながら突っ切れるような化け物、デメーしかいねえ」

低く、そう命じる。だが、相手が沖田だけに、そううまく事は進まない。

「俺に、チャイナ娘をお姫様抱っこしろって言っんですかイ？」

明らかに不満そうな声。土方は舌打ちした。

「四の五の言ってる場合じゃねーだろ！お前しかいねーんだよー！」「嫌でさア」

即答。

「…副長命令だぞ」

「聞けねーな」

「切腹するかコラ」

後ろで、沖田が黙りこくった。そしてしばらく、土方と沖田の我慢比べ。

数秒がたった。

「……給料上げろよ」

沖田が、神楽のほうに向かって走っていく気配がする。

「はあ…」

これで良かったのだ、と土方は思った。

これで、良かった。

2人の若い命を、守ることができるのだから――。

「おーい、チャイナ」

そんな土方の思惑にまったく気づかぬまま、沖田は神楽の前に膝をついた。もっとも、意識は銀時のほうに向いている。

——旦那、アンタの家族は、俺が守る。こんなゴリラ娘、癪だな…。その分、あとでたっぷり礼をくだせエ……絶対でさア。

小さく頭を下げた後、沖田は周囲を警戒しながら神楽を抱き上げた。

「銀ちゃん……!!」

弱々しく伸びる手。

その仕草が——姉との別れを惜しむ弱い弟の姿に重なり、彼の苛立ちはさらに募った。

「黙れや。この状況で旦那のことあーだこーだ心配したって、てめーが死ぬだけだろうが」

吐き捨てるようにそう言い、彼は神楽とともに階段を降りていった。

途中、「乙女の体に気やすく触るな!」だの「変態痴漢男」だの「死ねドS」だのと、ありとあらゆる暴言を浴びせられたが、とにかく無事に工場を脱出。

「あーあ、やっと出れた」

彼は日光が苦手な神楽を木陰に寝かせた。というか、放置した。

「さてと、俺は戻るとするか」

上着を脱ぎ捨てる。

「さっさと行けよカス」

「カスで結構、クス娘」

沖田は振り返ることなく、再び工場に向かってずかずかと歩いていく。

「……」

神楽はしばらく何も言わずに彼を見ていたが、やがてその背中にためらいがちに声をかけた。

性格悪い子供の保護者は親離れしようにもできない(2)(後書き)

ちょっと急いでで改行なしです。すみませう。

(08・01・12編集 第3訓を3パートに分割)

適当に絵を書きました。

蘭冥のキャラ絵です。

下手ですみません・・・・・・。

>i38599—3606<

色気も何もないです。

性格悪い子供の保護者は親離れしようにもできない(3) (前書き)

なんか、なんとなく、第3訓を分割してみた私。

昨日第10話を読んでくださった方は、全く同じ内容がここに出てる感じです。

手抜きを投稿だ！

なんて言わないでください。

最後まで読んでくださると、私の下手すぎる絵が載ってますので・
・ (笑)

性格悪い子供の保護者は親離れしようにもできない(3)

「サド…銀ちゃん、大丈夫かな…」

「ああ？」

沖田が、面倒くさそうに神楽を見る。何言っただコイツ、厄介な娘だ……と。

いや——違う。

「何言っただお前…変なこと言っなよ、縁起でもねエ……」

面倒くさいのではない。

神楽のその言葉で、余計に不安感が増したのだった。ひょっとしたら、人生で得た3人目の悪友を失ってしまうかもしれないという、かすかで大きな不安が。

銀時が強いことは、もちろん知っている。

しかし、体に2箇所、あんな弾を受けたりしたら……。

唇を噛んだ。

「もう一度言ってみやがれ。ぶっ殺すぞチャイ」
——ドオオオオオオン。

その時、轟音が響いた。草木が揺れる。鼻孔を刺激するのは、火薬のにおい。

「あつ…!!」

屋上が、火に包まれていた。先ほどまで自分のいたところから、黒い煙が上がっている。空を覆い尽くすほどに濃い煙が、パチパチと火花をはらんで、高く高く。

「土方、あの野郎…」

沖田は、土方が先ほどあそこまでして自分と神楽を避難させようとした理由を理解した。

次々と、沸くように出てくる大量の敵。殺されていく隊士。

これではらちが明かないと思った彼は、爆弾を使うことにしたのだろう。

「馬鹿かアイツ…あの、大馬鹿の副長めが……」

きつと、隊士も何人が巻き添えを食らったはずだ。土方本人だって怪我をしたかもしれない。無事では済まなかったかもしれない。

何を思って、俺を守ろうとしたのか――。

「馬鹿だ…馬鹿だ……」

沖田は脱力し、地面に座り込んだ。

まだ、陽が落ちる気配はない。

性格悪い子供の保護者は親離れしようにもできない(3)(後書き)

まったく、テスト前って時に、私は何をしてるんでしょう。

いい加減腹が立ってきます↑

さすがに、明日あたりが最後の更新になるかもしれません・・・
毎日はキツイ。

受験終わったら、ぼちぼち白夜叉さんにも活躍してもらおうと思っ
し、そういえば旦那様を失った神楽の苦悩についても書かなければ
ならない。(↑別の小説)

あ、それと、これが前書きで書いてた下手すぎる絵です。↑

> i 3 8 6 6 6 — 3 6 0 6 <

何やってんだコイツらは。
体の位置関係もおかしいし。

御目汚し誠に失礼致しました・・・。

第四訓 一富士二鷹三なすびなんて見たことある奴いるの？（１）（前書き）

なんか、今日は一段と閲覧者数が多かったなあ・・・

何があっただろ。

第四訓 一富士二鷹三なすびなんて見たことある奴いるの？（１）

「うつ…イテテ……」

銀時は目を覚ました。

頭に、石が乗っているような重い痛み。

「ん……何だ」

半身を起こし、辺りを見渡す。

万事屋、ではない。

病院、でもない。

もちろん、工場でもない。

見たことのない灰色の景色が、一面に広がっていた。

…いや、厳密に言えば、万事屋を始めてからというものの一度も目にしたことのない景色が。

「……は…！？」

戦場。

その言葉が思い当たった。

がれきの山、くすんだ空、焼けた木、乾いた風——記憶の奥底にあるそれと、見事に合致している。

だが、その割りに人がいない。

どこにも、いない。

声すらしないのだ。

「地獄…なのか。俺は、地獄にいるのか……」

彼は地面を見つめた。灰がうすく積もっている。思わず咳き込んだ。

「地獄じゃねーよ」

不意に声がした。聞き覚えのある声だった。

「!？」

反射的に顔を上げる。男が1人、目の前に立っていた。

「高杉――」

「ようやく会えたな、銀時」

紫の着物が、血のにおいの風になびいている。煙管から吐き出されているかすかな煙は、いずこへともなく消えていった。

「いつの間に……」

「いつって」

高杉が、くつくつと笑った。

「これが、現実って奴さ。俺の求め続けていた理想……お前の避け続けていた未来……それが、現実になっただけだ」

まるでお天気の話でもしているかのように、その口調に重みは感じられない。

「お前の護りたかったモノは、こんなにもろく崩れるようなおもちゃだったのか……残念だ。大事にしていたおもちやを失くして、ただ泣く赤子。今のお前は、それくらい無力な存在だ」

高杉はそれだけ言っていると口角をきゅつとつり上げ、そのままきびすを返した。

「おい……待て……！」

追いかけようとする。

が、金縛りにあったように、体の自由が利かない。

「高杉！戻れ……！！」

もどれ…どれ…どれ…どれ…ね。

銀時の声は、廃墟となったビルに反響するばかりで、冷酷なかつての戦友に届いてなどいない。

高杉の後ろ姿が、小さくなっていく。

どんどん、どんどん、視界から消えていく。

そして、それと比例するかのように、体は力を取り戻し――。

「何でだよ…何が起こったってんだ」

高杉が完全に見えなくなった頃、銀時はようやく立ち上がった。

「ああ…」

あらためて、冷静に周りを見つめる。

すると、さっきまで目にも入らなかったものに気づいた。

自分の足元にある、物体。

「お妙……？」

そう、それは紛れもなく、妙だった。

彼の右隣に、薙刀とともに、血にまみれた首だけが転がって。

「お妙っ……！」

第四訓 一富士二鷹三なすびなんて見たことある奴いるの？（1）（後書き）

ダメだよ銀さん。

あんな大けがしたからさあ・・・かぶき町、滅ぼされちゃったじゃん・・・。

って感じですかね。

さて

明日から新学期だ。

で、いきなりテストだ。

いつそ、銀魂の世界に逃げたいですw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9221z/>

白夜叉再臨

2012年1月9日21時54分発行